KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

ル 3
3765
1

門ル 3
3765
1

49-2637

分類 ろろ
番号 507
通番

吾妻路に越へ侍りて志ら
なれぬたゝ東の住まれ所に
まゝれわゝもゝ
ゝゝ主人の居ゝいとゝ道教の本
ゝゝ世農人とゝ訪こゝ
ゝゝわゝ里雞鳴見る
ゝゝ秋里雞鳴見る

ゝゝ者ゝ
大木曾小木曾の名ゝ
ゝゝをこゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
言流ゝ求ゝ

[illegible]

文化二乙丑三月

文章博士菅原尚長卿

松菊齋主人題

中ごろ紅葉の色をとゝのへて
行わしたる所にかこの光れるの秋の
ゆくへをあらいかう行かゝりうゝ
のゝ面こゝろ
なれぬ法ゝ所なき志
なれ歩人ゝ地面をとゝる
あるこゝはうゝ所きゆゆりこゝ

つゝこゝ
ゆゝんゝ
中ゝ
ゝゝ
みゝ
ゝゝ

一ゝ法ゝ
ゝゝゝゝ
奥津藤ゝ
白絶ゝ
大ゝのんゝ
所ゝ所衣ゝ法

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文化二年二月

富士谷成元

岐阻路名所圖會自序

帝國圖書館藏

岐阻路名所圖會自序

岩倉姫美濃しるしかやうるあひさ[illegible]

馴り神社[illegible]

[illegible]十九のむ[illegible]

おもむく[illegible]道[illegible]

岐蘇路[illegible]

日本武尊雄[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]川に佐野の舟橋のあしたの事
岡部の里 藤谷乃辺 氷川濃淵 後の往来く
戸田川を渡りて江戸あんなるもたのしかりしハあやうく
而ありくしく道ゆく人もまれなりし
而り上人ありしかとかの[illegible]ひしかやの五名残の
残れるもあれ如来義仲あるその感已ゆ家に[illegible]
なりしかり今ハ治れる
御代にあひて道もやすくかけてもたのしの
へきくしたもりく出るの時ゆうかくゆく備る

ひとしもかく海を渡るうまへとかし 山賊のみ
あるくしく人のうて諸毒かに剛毅木訥に仁に
かるむ人馬のちかうほとく山川れかてう 艸木のうこら
外国にとりて字にハしく日と月を仮りむ
り人を仮のふとく[illegible]れ能ゆしくく
宦道七つの上に多てう七道の涙ゆ日光 山
かしく備番 能筑波根れにのものとあるうある
名ゆうに諸仏ゆもにてちんこかくかたあいめこして
の篠れきしにうるに[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]海士の[illegible]れ

[illegible]

文化元きのへうの九月

秋里籬島

凡例

一 岐阻路名所圖會と所謂東山道なり今俗ふ中山道とも
いへり京師より起つて江戸に到る都て道路信濃上野
武蔵等五箇國乃道條ケ条て件を古蹟街道と云六十
九駅道法百三拾五里餘なり名所古跡神社佛閣を國
會と云駅毎に図をもつて記し行程も其中に載せん

一 京師より茨津の駅までを東海道名所圖會と称し
ちくふ首畧して其漏たる所補ふ其より嶋毎に先編の例を
もつて記し街道乃神社を延喜式神名帳に載ると選ぎ
ちなみに又大廈ようてうそいたるまあらば所謂御嶽駒ヶ嶽ふく
渾て方位を示に其位に循つて茨の東何里茨ふん小
何町ふあり也疑しく又神社佛閣乃左右も其神新本

るの左右なり又道條左の方右に入ること江戸より東関ホ
赴く旅者の左右なり

一　五卷六卷ハ江戸より東に到る香取鹿島流波山日光名の
名所をもらん波蘇圖會附録ホ備ル

一　日光山ヨ貝原氏参詣記あり彼此ヲ考ヘ絵畫又ハ日光
名勝志の系板を拔革し又古老の後孤も拾ひ概略あり仕
後人の補遺を俟而已

目録

内裏舞御覽御圖　洛三條橋　白川橋
粟田山　日岡嶺　御廟野　四宮河原
逢分　走井　蟬丸社　開寺
開清水　○大津　姥禮堂　三井寺
唐崎松　矢橋渡口　膳所城　粟津原
勢田長橋　石山寺紀行　野路玉川　矢倉
○草津　○守山　宇山寺
擂觀音　大寶社　布施　御上神社
三上山　野洲川　平宗盛墳　蛙石鳴池
鏡山　篠原社　牛若九拔宿家　長者碓
筑宿

十蓮坊墳　武佐寺　○武佐八幡

比年禮社（本社　神樂殿）　稲荷祠　若宮　大鳥祠　天照太神社　拜殿　楼門　鳥居額　末社

長命寺　水茎岡　蒲生野　老蘓杜

奥石神社　鵠鶏神社　淨嚴院　惣見寺（三層圓通閣）

安土山古城（日記）　桑實寺　箕作山古城　小松寺

瓦屋寺　観音正寺　観音寺古城　地獄越

石馬禪寺（本堂　圓鑿堂）　方丈（後行者）　地蔵堂　多門天　雲居松　石の馬

愛知川　○愛知川驛　四十九院　○高宮（神樂殿　楼門　三宮　日出松）

葛籠細工店　犬上川　唯念寺（高宮鳩　細布店）

多賀大社（本社　末社　狸殿）　不知哉川　鳥籠山　磨針嶺

○鳥居本　米原道　彦根山

千々松原　磯寄祠　彼摩祠　彼摩野

朝妻里　長濱　将軍山八幡宮（本社　高良社）　竹生嶋（本社　観音堂）　余湖　○番馬

蓮華寺（本堂　六波羅山）　琵琶湖（稲荷祠　護摩堂　薬師堂　地蔵堂　妙覺院　什寶數品）

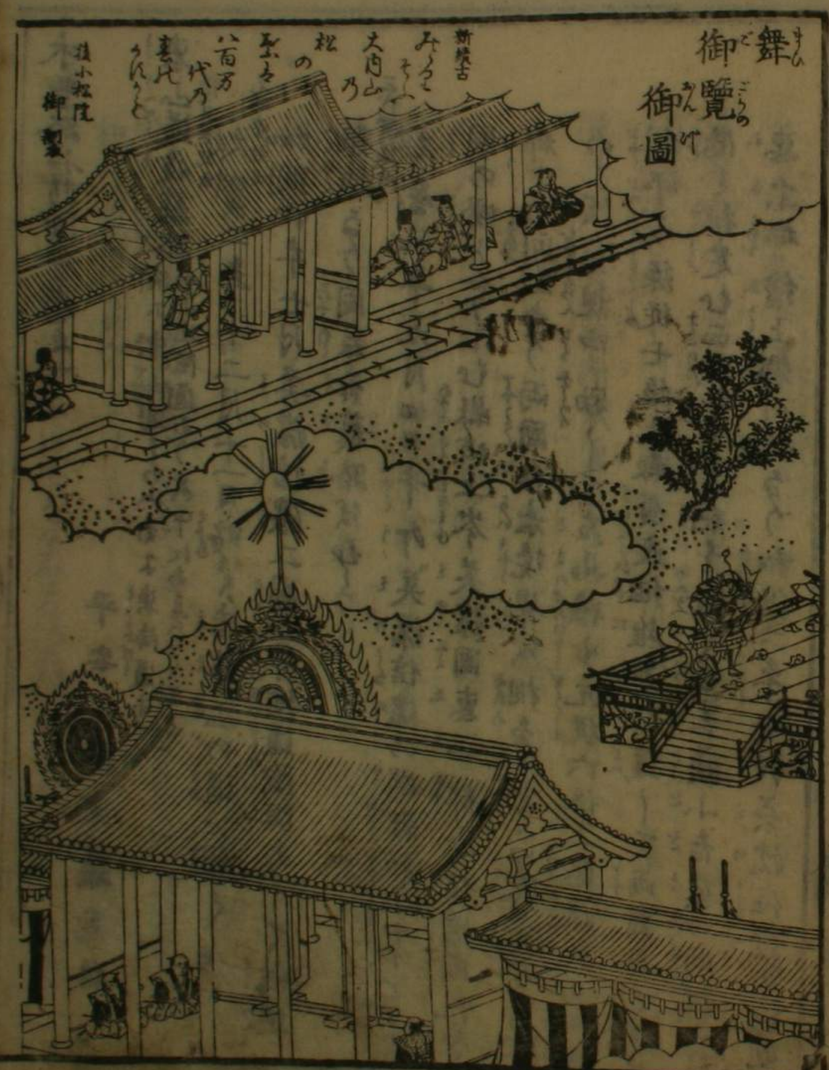
○柏原　伊吹山（滕吹丈　敢願梅　土肥墓）　○醒井（四石　三水）　地蔵堂　長尾謙信塚

谷山仁長

琵琶

見說岐蘇多勝縱山川
都與蜀中同誰將一部
好詩料得似石湖兼放
翁

愚山愼題圖


舞御覽御圖
新春吉
みくらと
大自山乃
松の
玉ゝ
八百万
代乃
喜代
うたうと
雅小松院
御製

木曾路名所圖會卷之一

平安　龍里蘇島編

東山道後蘇路　俗ふ中仙道あり　東海道あり　共中にあるべく弩し

續日本紀云　大寶二年十二月始めて吉蘇山の道を開く　元明帝紀云　和銅六年七月美濃信濃二國の界徑道險阻多して往還難るり因茲吉蘇路拓初めて

三代實録云　元慶三年九月四日辛卯美濃信濃の國縣坂上岑と以て國の堺とせむ縣坂上岑美濃國惠那郡と信濃國筑摩郡との間ふあり両國古来境界拓相爭ふ久しかるに変ることなく

あるに貞觀中勅して左馬權少允從六位上藤原朝臣正能刑部少録從七位上大原直繼雄等拓遣して両國司と地よ隔てを相定む正能等舊紀を撿て云吉蘇小吉蘇の両村られ惠奈郡繪上郷の地和銅六年七月美濃信濃の両國

の堺徑路險隘往還難るを以て吉蘇路を通ずる七年国二月美濃守從四位下笠朝臣麿ふ封邑七十戸田六町を賜ふ少録正七位下門部連御立大目從八位上山口忌寸兄人各位階拓進む吉蘇路拓通ずるとて今は地美濃国府を去る事約十餘日信濃國よ於くは寅過迄ふ若信濃の地せば何拓美濃の國司拓して遠く開ふ入る彼通を通ぜ〳〵めんや由て正能の定ふ所よ從ふ

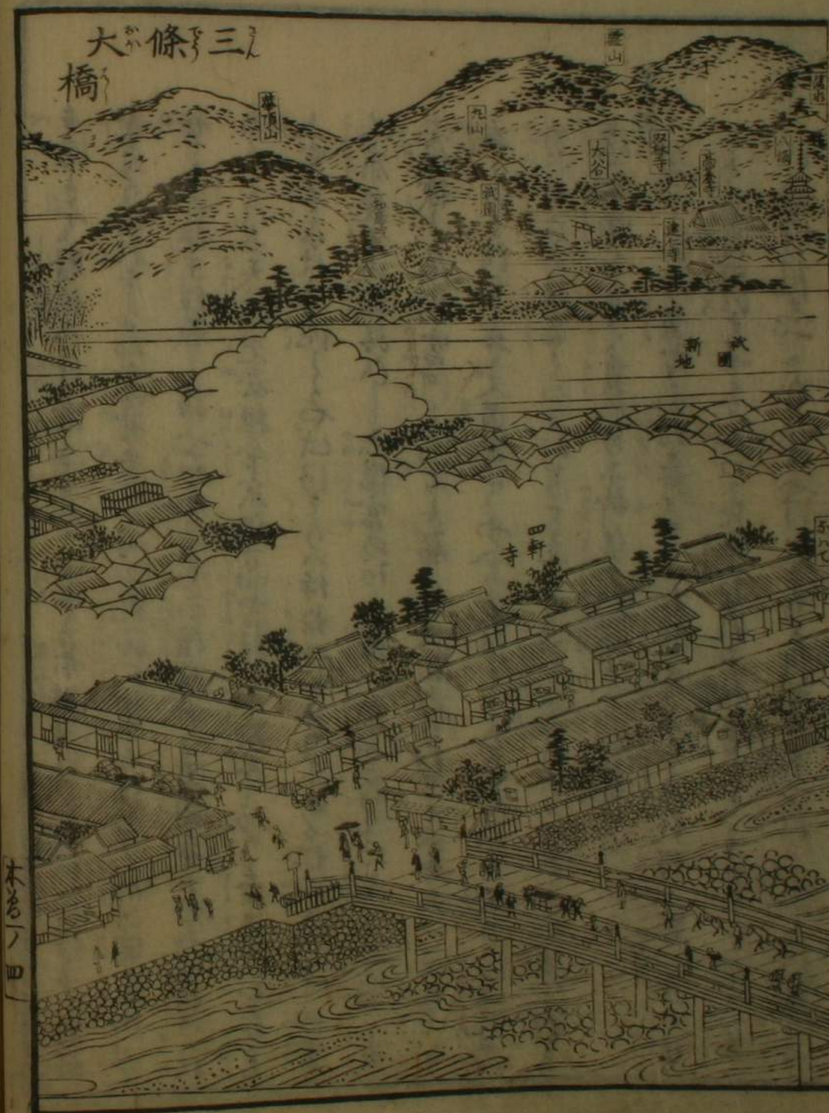
按ずるふこと是て〳〵の事ふ百年許ふ日本武尊の佛ふ在雄日嶺ふて阿亞森波夜くせ三度歎ずるのふと日本紀ふ見へたり又古事紀ふ甲斐國拓經て科野小出く尾張よいたり給ふ〳〵ん吉蘇路を延喜式ふ信濃ふ和奇集ふ見へたり

拾遺　中くよりひもはるそ信濃なる木曾路の橋乃抓さるる巻　保穂主

洛の南風さそふ賀茂の流乃ち京風坊の橋はやくより形る。河原院荒廢てふ
古跡離島の高ふ年久しく見行く。名ふ〜地ふ遠道の名どころを尋ねて
てまゐ都園舍城は。荒〜いつの戴冠をめぐりたるとくら乗〜く
雲乃ちとぐ〜河〜ふ。七年北山人あゆ之人部に東海道園舍を
はぐ〜ぐ〜びはこ吉蘇路を経く行ふ。ふ〜ふ番取麻高瓶波山
城めぐりかけ古く考ふ〜紀日光の　御宮武蔵〜黒坂宇登路。
其道芝の名ふ〜教所をたづねてめぐりも思ふひさ古稀ふ〜ばさて
繁の和歌く昭ふ考ふ〜歌の藤をうりても倒の癖地ふ〜わ道祖神ふ
ふ行きにあひて。ふ〜京ふ和二のふ〜北裏卯紀月中の六月〜ふ
日ふ殺ふ見。まゐ都のふ〜閑るれば若葉減道の路〜り赴ん〜て。ふ〜
形く高羽山の道ふ。狭の中〜武たぐ〜ふ流谷の嶺を越く。紀ふ出く
山科の里城を見ふ。ふ〜ふ乃農家ふ掾金屑丸てふを因ふ〜けて牛尾
道の別ふ〜ふ〜ふ〜ふ。これ北ふ〜わてりふ奴乗屋は先祖ふ斤器世

べい走湯ふて射術の達者ふ〜り今ふ庵ふ茶籠武飾ふ北の山北ふ東ふ安禄
寺ふ〜りこれをふん高北山ふ〜ふ。毘沙門堂ふ倍数人師の冥奏御寺
勢ふ法親王住職〜ふ〜ふ。石ふ月光宗檀林ふ〜り護国寺ふ〜ふ緒羽の社
ふ〜りこれふ天津児屋根命武祀る四宮村ふ十禄寺ふ〜り幸尊い聖覚書
上宮寺ふ〜ふ〜ふ〜

白川橋


三條大橋
四軒寺

みりそむ西谷の百ようひあらせ給ひし蟬丸ようひろう芝居人
紫宸の内くるに入りて思ひをのくわ嵐れ風くげーきは春つ
とる〜やはと言と涙をはらはらけるあれ人の輝丸を延喜年四の宮をてう帝と申ふ
山せんのあうと四の宮と名ばけうゆうへ

つ〜〜人のつ〜屋代庵ろ　光行

逢分沈迫見べ御路猟して紛よ乗れ人こそ乗行馬あう南る仏興あう
牛車を地ばく儀物を様く逢坂をこゆる港の例乃針屋を月代ぎく
爆氣うる新して針磨宮もいくこび。一里塚茶の尊盤を其名宮。
小車の店大津絵の店。百くふあうて北之の名物しうや走井の清水輝
丸宮両國寺むーれ開所の弘開明神罪ほ水。逢坂をこうら越られ
たゆ孫久ん迫江の湖ともむふーりくぷ坂を町をすぎて大津
八町の駅ふいる乳

京師ようりこ千で三里大和國龍島寺ようり海のみ和ふ
茶津ようで三里まで六町　光行
まえ乃紀り
ようりもむーー天智の宮をほうりをのふーくにもん場るれ五
都うりもあ乗て大津の宮をほうりをのふーくにもん場るれ五
の跡ぞうーゆそんくゆ

けう波や大はの宮氏あれ乃ら所のく波まて走の宮里　光行
山駅を都ようけーゆそ所ようれ張令人馬ようく乗うて喧〜
涙を一のうさを海國ようよ弘せ新く弘長の花屋ーきうゆ入れ山私
旅ひ弘く大津の町乃教九十六町ありゆそうん母ーれ皇氏の河くを
今の石京氏の河ようれの辻ーう西ようの三井寺巡礼乃祝ち
高記寺を迫松寺ようれ

けーく寺を陳寺の浪ようーこ号して山の上ふあり長生山を氏山清ーこ
弘ーこ寺を周城乃宮氏ようの殿舎弘浪ふ寺に弘ーくを
弘ーこ寺を周城乃宮氏ようの殿舎弘浪ふ寺に弘ーくを
弘ーこ寺を周城乃宮氏ようの殿舎弘浪ふ寺に弘ーくを
弘ーこ寺を周城乃宮氏ようの殿舎弘浪ふ寺に弘ーくを
弘ーこ寺を周城乃宮氏ようの殿舎弘浪ふ寺に弘ーくを
弘ーこ寺を周城乃宮氏ようの殿舎弘浪ふ寺に弘ーくを
弘ーこ寺を周城乃宮氏ようの殿舎弘浪ふ寺に弘ーくを
弘ーこ寺を周城乃宮氏ようの殿舎弘浪ふ寺に弘ーくを
弘ーこ寺を周城乃宮氏ようの殿舎弘浪ふ寺に弘ーくを
弘ーこ寺を周城乃宮氏ようの殿舎弘浪ふ寺に弘ーくを
弘ーこ寺を周城乃宮氏ようの殿舎弘浪ふ寺に弘ーくを
弘ーこ寺を周城乃宮氏ようの殿舎弘浪ふ寺に弘ーくを
弘ーこ寺を周城乃宮氏ようの殿舎弘浪ふ寺に弘ーくを
弘ーこ寺を周城乃宮氏ようの殿舎弘浪ふ寺に弘ーくを

護法善神新宮権現熊野社金堂の侍るゐ御井あり天智天
武持統三帝降誕乃產湯を此水にて拵たまへり又此湯ゆく
三密灌頂乃關伽にも慈尊三會の曉此水朝とゝ
名泉ゆゑて寒暑ふ塗滅なり　梵語に金堂の前上壇の地に立
高五尺立寸亘四尺そ寸原三寸五分龍頭長三寸六分天竺我
国精舍長の方ふゆゑ所に佛滅後龍宮城ふ入りが延喜乃頃
俵藤太秀郷龍の宮にうこれを得くあゝふ寄附し食堂に獄迦
佛を安し赤梅檀の霊木毘首羯摩天の作に此掘例うに大鶴あり
にの廣四尋あり此唐院に智證大師の建立寺門派創祖の
所に唐の青龍寺に模して中央ゆ智沈大師の像に不動
右に大師の御骨護摩堂に唐僧新山王祠寄藏しゆ大師唐より
將来の三寶ふうにぐあり十八神祠に南院ゆあり燈幢石壇八金堂
の前ゆにうこれに天智帝遷宮入麻を誅しゆ其罪障を悔く

仰盛況柔建し真法供養を設しゆ所に紀義ゆ足利尊氏公一城
紀を養む自筆の奥に書たり又慶長七年ゆ毛利輝元唐帝の
一切經を寄附せ所に教待仏人の入定堂に金堂の東北にあり教待
和尚に神通延喜に仏法に一百餘歳にして貞觀元年の春
にめて智沈大師に見て高山に附屬し其後石室に入り後に其
壽一百六十二歳にて本朝神仏傳ゆ三年寺教待仏人宮城賀
郡の人にり百餘歳を歴しゆ常に容顔壮年ふ等し常に魚鼈
に食に其骨忽然として青白二色の蓮華しゆ正法寺ゆ
福神石あり人悪鬼に成に良にり袈裟懸の八幡服ト
にて時天皇行幸ゆ朝妻里に遊ふ見ゆる立別所に迎松寺
尾義寺鹿野寺水記寺常住寺にり安鉄石塔安八詠橋
の上にあり早尾の原に行に為に至寺の西にあり山王廿一社の内
にり亀丘長塔橋村雲橋夜櫻浄明水二王門小院中院南院

中てあり周長ゝ智光大師ゝて天台宗に修験道を兼る武大師の
廟堂ハ地叡山四明嶽ゝあり景行天皇五十八年壬二月迫江國志賀
里ゝ都遷ゝたり」由日寺紀ゝ云てゝゝゝ今志賀の郷内西郡村へ
此地ゝ清泉あり極く美味ゝ美酒の名神社佛閣の古蹟
とゝ見るゝハ水の美ゝ味ゝ今ゝても賞賛ゝ堪ゝ小岩会
ゝ智辯ゝ吉田ゝ明星ゝ黒谷ゝ雲ゝ園ゝ吉水清水寺に
柔清水其外数ゝ所あり浪速ゝ行城ゝ黄金水天王
寺ゝ亀井ゝ名水ゝ志賀山越ゝ赤塚ゝ
登りて白川ゝ出る鹿賀の花園を新左衛門ゝ所なるべし是
迄紀ゝ里ゝ行ゝ貫之詞ゝ真寺村ゝ岩屋庵寺の名
梵釈庵寺の名ゝ定ゝ此内智光秀の城績ゝ赤塚村の上方
ゝ庵僧ゝ海ゝ童神を祀る一ゝ松ゝ樹のめぐり五抱弁
るサ二丈枝五のまわり数百間ゝ付茂ゝて霜雪ゝ

凌ぐ千巻ゝ城常ゝ海ゝ
ゝ〜ゝれゝ杜ゝ〜ゝ亀ゝ城ゝ
と峰〜雅ゝ〜ゝ
志賀郡西郡村ゝあり堂
これ其頃の遺跡

古事記云 若帶日子天皇坐近淡海之志賀
高穴穂宮。治天下也。此天皇娶穂積臣
等之祖。建忍山垂根之女。名弟財郎女。
生御子和訶氣王。一柱故建内宿祢為
大臣。定賜大國小國之國造。亦定賜國
國之堺。及大縣小縣之縣主也。天皇御
年玖拾伍歳。御陵在沙紀之多他那美
也

山科の
道絶
屋敷を
人家
建
今も
ゆき〳〵の人
ちふ
道時也

ひとり
餅の
ふれ

志賀里 今は中に流れ枕詞同級の遠路を云ふ

新古今

今こゝらい志賀の辺の花ぞ見ん春ふたたれゝ人まれ帰る里

玉葉

神よいかに都の春ふかなれ春ふる志賀の古里

右衛門督公任

志賀浦 はやしの湖の浦とよむべし

拾遺

けふ来ぬ志賀の浦風いかなれば心のうちにたちとしぬらん

拾遺抄

みるめこそあふこの浦風なれなれとうらのゆくへ人ぞ知る

拾遺

橘ふくひれ山風のふせ〜波志賀の浦に立そ寄る

千載

こゝのへまて御よ法師志賀の浦に立そ寄る

八条

右大臣

新古今

志賀の浦や遠ざかりゆく波の上に月の出る方の月

家隆

同

こゝ波や志賀の浦〜に風寒て比叡のそゝ根小雪ふる

従五位下右近衛中将藤原為家

新勅

志賀の浦にふの色乃ゆ〜天そゝうけるいかゝ乃ゆ

藤原為家

後拾遺

いかゝ人の法るれ梅よ風の白ひとゝ人ふ志乃ゆ風

後宗尊親王

同

見人ゝめる人志乃ゆ海士のいとゝ春ふ花ゝ人ゝ

同院右大臣

新後撰

志賀の浦乃松吹風の音ふかなれ波千ゝ寄てもゝ帰ゝ

法皇

同

志ゝれあ乃乃ゆ乃ゆ乃ゆ

にあり小船入あり松木栗ゲ浦しう紅葉して矢橋浦へ三里の口とし
なりこれを見わたせば左右の廣濤の松右あり栗津城を見て紫風る
まぼ帆はしらく漕更よ矢橋ハ菊陸地なれば志賀村の義仲寺
ハ朝日將軍義仲の塚彫落師たゞ世紙義の墳あり菊が渕と是
今の松本村をゝ石山寺記云むゝ〜字を天皇和尚寺ふり幸
〜ゝ時法海の國司大伴の義とゝ人は渕ふ行宮を志ばゝひ
ゝ紅葉を載く法華城答度を新は城よ栗が渕とゝ又玉造
の者なりゝ大内裏の御ゝ紅地ゝて危を燒洞進けるゝ今は危師
あり膳所領の門をゝまゝ城下の町ありゝゝ年多慶六万石を領世
ゝ城あり湖水へ秀て風色いちゝ風〜所ゝ八大龍神宮左の方
ふ泉水寺新城はゝく本はゝ近ゝ近ゝてあゝふを八大龍神
の社なり中近ゝあゝ膳所の神左の方危の渕ふ陽岩ゝ清水ゝ
若は祀る田畑の社ゝゝ中ゝふ牛頭天王稲荷社あり宮所ふ

宮八幡宮新羅明神あり故ゝく宗歸五ッなりて五ケの所ゝゝ
故ゝく今の膳所を栗津ふく杜聖泊などゝ縁者〜

後撰　開越て栗津の杜ゝあゝ人ゝも清水ゝ見ゝ〜ゝ紅葉ゝ

後拾　あゝ川聖ゝすゝの落角ゝ見ゝ多ゝ紅ゝ駒ゝ

新後拾遺　いさゝゝふゝゝゝ衣ゝゝゝて降雪ゝ栗津の小松ゝふ春ゝ

新続古　栗津の〜菖ゝ末栗の陸ゝて有やゝ川ゝ人ゝ

新拾　相坂の名ゝ者ゝく成ふゝゝふゝゝ世ゝ

あゝ川ふゝゝりてよゝみ侍ゝ

新勅　東海ゝゝゝ人栗ゝの落ゝ人けゝもゝゝゝゝ神ゝゝゝ

續古今　膳所

雜体　膳所ふ地名ゝ是称ゝて山ゝあふの第七日の間ゝ五ケ所の門

頭屋を立ゝく其家小弦の幕ゝうゝゝゝ人乃十分一の初穂と

是ゝゝゝゝゝ迫ゝふゝ山門ゝ九十九浦の初穂十分一を神

供料ゝてこれを支配ゝる栗津姫世変陽煩の両人ふ受ゝて

粟井仮の神供を四十九膳調へ例年の日音楽を奏して神供を
唐崎の沖に出て侍古例其方文天福元年四月二日に行ひ右大将頼朝
公に成り渡さるゝ事今に至て
の者人不絶の初穂を受て社
田畑の面〻弘陽寺に活水
の涙ふあく山王祭の日本八膳を日沢ふ貢せ〻也古ふ
即此地に入むゝ解免
文本　吹ひて氏神氏子に成る者
國分寺の古跡に今の別保
幻住庵八幡宮の前に芭蕉の遺跡
弘自筆に深ひ〻石折
沙の遺跡に
丈記ふ
膳所の古跡に近八幡宮の陣地

今に至て絶せず系勝の訪
の本も有り夏本之
逸平使に入る事三町許
鳥井川に霊社
見に成る石山寺
より石山寺の
ふ仁治元年十月十二日
当二時如意輪観音に
良辨僧正十六の像
神右金剛蔵王二十八部
舎利弘法大師利
氏間に〻〻完弘の頂
書法に訪し硯石に源氏
今に至て

源氏物語を書かるゝ新ふ牛と鞦しの雕物あり海二つありて隈
法の左右にしるしるや大殿若經堂の式部が自筆と三十八所社を商山
の法華堂なり法華の十羅刹女ふ千手の二十八部衆式部くはしく
第武部語二層塔を建久の頃教弘郷の建立し移ゝ平
を大日如来四隅の柱りハ二十七尊の画像なり丹青妙麗なるわ種弘
墓改子尾墓經塚を考據神勅しく一切經を写さ光く花め
移ゝ親鸞亭ハ本尝の寺ふ上あり又諸縣亭しもゝ湖上の釣舟
あるを勢田橋の切人眼下にあるて清綾をるゝ真るゝ猪橋を中
堰の地ふあり氏徒を移文ようなりしやを石山記ようなり御新堂を
中央ふ弘法大師を小良雑侍ふ石ふ内供涼就徒ふ八組の画像
あり八宗接を沛新堂のあふなり用山良雑南都ようるふ裁させ
移ようなり方樹を植く種徒を新繁石沈良明神ふ画ハはるせ
なゝふ石ようしを畏ふ石階のうゝあるり食堂を下壇の地ふ

なり聖傍文殊弘安沈良明神新宮石を食堂の南ふなり移座
樹現を齒山の結手ふ繼那樹現の別社ようる經仏弁を下壇の地ふ
あり水源を本尝の下北石ようる流を出る此下流をあり川ようる天狗
杉ゝ山のへにふなり柳が滝を業暦の法本堂圓通の記記をるふ
発出を出移ひ柳乃枝ふ沛ふ沛しようふ移完ようふを経仏弁の奥
三所許ふのりむゝようれ霊堀あるて寂寞なる所ようる実ふ塵
外の仏境しもゝて奥院を暑ようるも沈水洞どむゝ早魃のゝ
移西を移ゝふ霊移あり風表石を山例ふなりひゝ歴海水ようる
乃上ようて移ゝ孔雀經を漢通移ようるふ移王壇上ふ昇移沈中
ゝ来出現ゝて和尚を数あゝけるを義平墓を就完ようる二町
許奥ふあり山を西ふ西源を義平墓を就完ようる二町
て六波羅く引く強せゝを幸平治物語ふあり山中移ふようゝく
ようふ塔を築くようくようる小屋を山を西ふなり義平が墓ようふ

響しけるとぞ聞し行履岡を尋山の蒸籠ゆゑ浸祐習をこゝに送りしく
昇天し給ふるん柿尋山を天智帝けぐるみ天ぱの宮ふ立せ給ひ
慶雲の往端をこゝに聖跡を尋ねいまゞ仏蓋の往昔時を
ら民甚役雲武天皇良辨僧正を招かれ八葉の嶺上ふ仏蓋を
言万代の宝祚を護る勅願を祈り給へり

石山紀行

去る年の秋乃八洛氏物語ぬ申るゞきれり迄物ゞうして八月
十四日石山寺にくやの式給が参ぬたて給へ芳の車武侯るゞう
ゝ月はゝ〳〵十乳あり通来りてがゝこれ月見侍ゝむゆく
中て既ふ和りいゝら傍ふ洗乗ゝ見るの名歌を上ゝ迄人く
十五首乃寄城はゞ寄ゞ物ゞもゝる車なりてせるるゝくゝ
侍ゝと此事を金后きゝ〳〵先ゝはきくゝ侍ゝば系絡あゝ人爽
よゝ侍ゝ和来此ゝゝゞうにゝゝ東洛ひて遊屋ふなゝ地し

侍ゝて續申一部の功城ゝげ杖ゝ〳〵ゝて名わ又宗粮法師
紹巴法作ゝ迄ゝ国醍の紫ゝゝゞ形侍ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝを
とゝゝゝん考ふ広ゝ侍ゝの源氏の間ゝゝゝゝ丸て十百勅ゝ連歌
城とゝゝせゝ〳〵ば不堪ゝゝ老懐ゝゝゝ毎ゝゝゝ驥の尾に
侍ゝくべきゝゝ〳〵ゝゝせゝ〳〵ふゝゝ〳〵ば袋句の題ゝゝの拙ゝゝゝ長
月孫をとゝゝて若葉の袋句城ゝ出ゝ侍ゝゝばゝゝゝゝゝゝ
城ゝりひゝゞし十九袋句をゝゝゝゝゝ天文廿四年八月十
四日に和りひゝゝ書をゝゝ侍ゝゝゝ往の色ゝゝゝゝゝゝゝ
侍ゝゝ歌栗田山ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
開城ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの流寺ゝひゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝゝゝゝゝの名坊ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
侍ゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]の源氏の間にて是をやまあさてあり四こ坊ゐどゐ[illegible]
[illegible]て是の所へ東坊志ゐ人は[illegible]
あるうゐ[illegible]しくよ[illegible]
いうぐうて又[illegible]わさに舎の坊とゐ[illegible]
めゆゐ[illegible]名と[illegible]
ゐ和人はやどわをとゐぐ[illegible]
爲の名ゐハかゐわ也よ[illegible]
如り[illegible]水ゐ[illegible]
又一休老師江山一覽と[illegible]
[illegible]び[illegible]後書光國[illegible]
一一連奇は舎の席も此坊と[illegible]
り[illegible]四美備ゐ[illegible]
[illegible]の舎の席は須[illegible]

[illegible]

[illegible]れも[illegible]四人の[illegible]
[illegible]紙送り[illegible]を金后の[illegible]
ある時ゐ坊より[illegible]
よわは[illegible]
[illegible]文仍系[illegible]
[illegible]の月のち[illegible]年[illegible]
[illegible]
[illegible]尊陛[illegible]百韻の連[illegible]あり廿一日舟[illegible]
ふゐ[illegible]舟[illegible]
[illegible]て半ちワ[illegible]
[illegible]
[illegible]

大津
小紅入
あつた
和博
の
波にそ
あぢまトて
伊勢すろう
そ
紅の
こぞるる
ゝ所の
紙ひ
うるべし

矢走の
嬢と娘よ
裏の風
吉祝

かりひさかたの一すぢの袖よりつりてて一系のこゝろ妹乃ち体風
むしろ〳〵行り此とあるに[illegible]ふ萩ふいや紅の[illegible]
にてつゝり侍れ〳〵きけもあつ玉のつゆ乾りや滅ぬん
和うれをはこれとうしひて杜こゝの折りひとはさを松虫の俤
いうよ移人身かゝ〳〵て老ふ妹のそ心すゝ[illegible]る秋ぬれもゝ乃
ゆんきむと見渡を新れるちにさ〳〵月のうけの白かさ
むし雲れ[illegible]月の折りひも死ようち[illegible]
くゝ東を見身れ[illegible]ある新続[illegible]
て称ゝ[illegible]契あ[illegible]
ゆ〳〵やこの白身[illegible]駒乃河と[illegible]
せ[illegible]ぬ[illegible]の[illegible]
折り見あ[illegible]乃[illegible]
ひも若の芹[illegible]乃[illegible]

植不出[illegible]りや妹の袖さ[illegible]雪[illegible]
ゆ[illegible]たゝ[illegible]月や秋身の[illegible]風の床
つ[illegible]の本に[illegible]
此[illegible]て金石剛言あり
長和も[illegible]
むゝ[illegible]
[illegible]の海や[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

烏羽玉の夏も花と十のむかるれわ〻仏と杖ち花ふく
せんとめてゐまれ月日は城ちを紀姫ちさ紀の業れちさ水
青そひく作ちつ波もうちむの浸ぎちひく神のゆちさ風
むちれつる身をうち丸と中を世れ人さ子はち紀と紀を
煩悩も芋提をひ〻ふあ結うとりもまれのち月のむ〻重
され〻ち〻ちる扶けてれ子と梨〻ちれしあ坂のやア
はちそちく市法の丸にさ紀梓の乗も嬉老ぎち紀さ浪

石山諸之記　長頭丸

ちつのえねの扶石山寺代淀ひ〻う生結ふて京ねちる氏
きちれち〻ひずてみかちつ結ちときてあちふ中れちる紀
どちちわれつどそ〻のちれる生いづ〻を子をそ〻のちれ
ちち晴ちり出結ちを中下の丹ちれむ月を羅をぬ〻ちて
たち中ひきち〻く化山の嬉ちく市出ちれむちようむの風青

ちまちくたむ〻のすむれをたあ紀までうげゆくにゆ〻くあけ
折くあ市のひをさ中に関のこ結ちふひけをちち人ち
て思あちさ紀ちさむ〻ちを紀ちを浦をあちひす舟上のる
青ち舟月ちわ月のうちふ人ち紀耕ちれむ〻山ヶ原む〻ち青ちや
仏をち〻ちるくちを紀ちるにを結ちるる橋ちをるむ〻く人を世中ちん
あ市ち〻ち紀と市ち〻ぬちれあでちるゆ〻ちれ〻そ〻結ふ風む〻れ
ちを生中を紀結ちれ京紀ばをのむ〻ち紀田のれちあて
引あちんちゆれさちぎち〻にさ紀む〻ちを人をち〻市紀結ちむ〻く
新ちやのわをん橋のゆ〻ちれちり人を〻ひ〻で扶を結ちやて
青む〻ち紀ちを中ちを〻ふちち水湯ち風巻浪西山檜と
徒法蔵ちちを生ちるをちうけれりをた市ちれむちちり〻ちのつを
これちち石山へちたむ〻一すむれ道ちんばを〻ふ屋ちちち外ちん
春ちを〻ちちりひくあを生を結結へ〻ひ〻ふをむを中をちを紀ちひく

小通さかわあんなどの中にりもんがとえんぐるまに
はきてからして結ぶてれ年経くあんふ中ふたがひよ嫌く
たうくいかるわくくのばるよ結れ〜れ〜れくよてる紙
又そはくいられよ書く山の石を結ひ作し水之風人さわ紙
御佛を拝こなしん人と堂乃兼こゆく小堂いら仕ち紙〜
秀頼公代御母堂乃この世後の無代御移ひのこちきてれり
水見てて御〜しく きてゐる新工むう〜拝がゆる月の今日
のひりあひくるをいとたれ〜うゐる山のくれひすわ
海をみれどせくの老稿し月のまんこみこれ山岩彩もくたく
ひ所くたもくく舟たはすまくやのんゆさう山やに
の口〜舟にくあんゆり者あり南にさすとろ者まと
ふみくれ手枝法はれのりとくるれをうつせとんでこひ
ゐづの思へ〜すはあ〜れくいちごえひどゐ

本ゐる二十八

の物語も世なりげよりおりひてて書そやさり水安て大作れば
作を世と之の中を生作をいどまもすくれんくもるればうをれわ
をそれ所をくく見むてたるぐものくよちのやるふ所の長紙が
峯にくをまる秋の夜乃月水よりあ新もくの峯れ年にや山を
いつの世よりいけの世をでよりよ作をを考氏拝れ〜すくこで
作をくれど人をくれくつわくをれのを拝をくをふをもこと
あすれひ〜ゐまれ〜それより源氏の間とて山所ひてくこれ
人くどれをを見まびれるれくれ方大ばりの西作ゐむ〜元
〜を武拝〜も之りくられそのよものれどれ拝むつくてず
すりをくるを拝〜ふくたどふ人考ふすがくれよく人考老
くれをかくくるる坊よやどりてたくく紙くれ水くを分くる
うをちくひ〜祝のの石山せけふををる光年の拝い
ゐくすふ年をくれを拝〜の年ふくれるくくなる度中をと安

奥様

石山即事　長頭丸

秋風識我石山行今日吹晴湖水平比叡峯高懷寺古勢多橋聳見虹横

石山紀行　澤菴和尚

有故人從故國來十年不詑亦親哉洛中相伴尋佳境關外勝遊自是催坐出紫園向洛東第三橋水更無窮粟田口外數村末逢坂留名關古宮蟬丸曾引琵琶殘澗水松風五月寒關寺跡荒留礎石小町今已淚欄干太陽停午大津津此處即是打出濱風收雨細水無浪萬境清湖一色新

太江之南淡津森常聞悲風怒濤音弔古戰場思舊記兼平最後猶若今渡景山田矢走舟長橋卧浪勢多流遥遠村路有層塔此夕借房投宿留

○此處即是石山也本尊者二臂觀音也見此山致境漫々湖水在前洗肉眼峨々岩石在後轉塵心溪水説法山風談空可謂上求菩提下化衆生矣往古者湖水窮而無下流故今之觀音堂者古湖水汀也怒濤顯山骨如大洋海岸勢奇石怪巖難盡詞船繫岩釣磯于今儼然寺僧語之鐘聲頻催暮帰宿房吉祥院同宿者如玄南都玄齋兩翁也院主茶菓點侍可噂也山之

緣起靈寶無所殘披閱夜將過初更五月八日之在半天微雲遊之雖然菩薩之慈月明々物外而照破群昏誠不瞻仰之卒賦小偈

歸命石山觀世音補陀刹界別何尋縱然天上被雲覆菩薩清涼慈月陰

○

翌朝又伴院主入堂開紫式部閑居源氏間則上間掛式部之遺像本堂雖近年再興源氏間者古搨猶存以是為證云云聞說式部上此山則源氏六十帖浮漫々湖水上矣此證實不虛院主師第携酒數刻有興玄齋法樂之音曲一聲皆人歌聽雖興未盡各下山又向舊路歸矣越不可無小詩叩信口云

光源氏物語始斯山式部遺名満世間渡夢浮橋

縦帰去一輪明月照湖閑

下略

西三條公條卿園陀磨沢菴和尚の古記文をゝみて如の道ふゆる
ゝ痛某所を訪しに安紙和幻住庵の意味國分寺に入る玉樓雨雅
の風騒紙地しさくの清水経塚を見めぐり勢多橋ふみ行ふ橋長
二十三間大橋長九十六間高欄葱宝珠銘を造営無ふ其年号を
識を一名青柳橋勢田長橋あるいは橋ゝもこれ橋ゝ
よりあり秀郷祠竜神祠を東橋凡ありて雲住寺これ紙寺勢田上
不動堂を田上川の水源高峯にあり左神山と号し塔色を動く
祈願を願る侯頼弘法の意弘を田上ふあり猿丸太夫が墓ふ其奥の
方曾来に宋り勢田の町長しゝ弟子藏舎ありて建新日神の廟ゝを
祭神大巳貴命なり例祭毎月中午日此地の生土神なり

あけぼの〻空にすりて勢田乃ながはゝうちつれ
こゞうみけるうにあゝもれて如の満堂ふ比叡山
ちの淵をの枝みて上ふ
こゝ貴ゆくゝ
ぼゝ

昌の原すゝひして勢田の町と色れ此所の名産を種魚ぼに
ありうるゞ勢田ゝと奥の上流あて漢乃よりゝ味池郷ふ橋まて
よく新ゝく組きさかり幌も亦あゝく結ひ〻これより三間栗
原川かゝゞ亦なゞ色〻く大沼特ふゝ新大堂新田を越まへ右の
方ふ月輪の池ありまゝ濁ゝ池雑天池月輪新田大沼光栗原
ゝ南笠村ゝ野路の條原ゝ古形ゝふ玉川の沼あゝこれ六ゝ玉
川の其一なり

前後略　さを鹿の声ゝむ森小林月ゝ色ゝ遠ゝ見ゝ乃玉川

土宰執筆
仲光

れてこせいこゝをとんでもひぐ〜と流るゝふうぐきはこゝみあるいぬゝ
里人すゝ子ゝ紙しめ南無阿波の郡ゝ見ゝ波ゝ見ゝ波ゝ見ゝ波

中くに廟あり祭神は應神天皇左に神功皇后右に
武内大臣天武帝の御宇白鳳四年二月十日大中臣清麿勅を
うけてこれを勧請し寺院建久元年右大将頼朝卿上洛の
時馬上にて報をあげくなの廟に絵馬を寄進ゆへ報先
の名所に社檀再興ありしかるに天文年間火災まのがれ
奥かたを

宇山まで一里半 此駅東海道本曽路街道尾張道名古屋
にかゝる也 駅中に立本明神の廟 絵上吾寺駒井氏
ゞ居人石碑あり易わく見るべし

東海道東海道別道乃宿端れに石標あり右へ曲る所東海道石
部の駅に出る直道なり東山道本曽路なりこゝ迄で東海道
名所図会ふたゝび出るれば御見原氏の本居路之記ふたゝび
の補遺にてこゝに抜ふ

草津川　東より西へ流れ橋あり　森あり　出水見へ　歩行口あり　流れ出る

俗に水源を金勝谷といふ　谷くゝ来る山田にて流水に入

草津の駅狐井の家あり　流れて野に出る　焼出し　高野井村法川村

是齋ゝ出石あり　和中散を売る　ゝ川村を過ぐ　徒村に社有

大寶天王社　祭神　素盞烏尊　大寶元年中　疫病ゝ時ゝ流行

ゝ新向の板ゝ　ゝ亀ゝ　二十解村の生土神と云　例祭四月

十二日　生土子　北中立村　頭を作ゝ　神あって頭数名居の

頭大寶天王宮　本社南向　側に若宮十禅師　同陸橋　末社二座

伝物　所も　ゝ　ゝ　ゝ

帆柱観音寺

駅中にあり天台宗なりて慈眼寺と号し

本尊は十一面観音長弐尺許むかし傳教大師入唐し帰朝の時

逆風和を驚し忽帆柱折おれり猶大師十一面観世音祈念

し逆風静まる事と初都さし移よ速ふ風波穏よかりて帰路

野洲川

東海道横田川の下流くま[illegible]なれば何ぞとて入く

彩勢

雨しくなり同茲其帆柱をもつて大悲の縁と仰をうふ安しぬ之

玉乗

旅人をみる法光ふあさ之くこ陸うちて[illegible]の川舟

彩裕

わる意ためえ[illegible]わ[illegible]中と[illegible]ふ[illegible]

哥林

早苗[illegible]

海道記

田中[illegible]

[illegible]

[illegible]

揚ふ風たちて響のこゑもそらひゞき竹の編戸に垣根
あれ苔はえすさんで山時鳥声のみうく鳴て之とのゝ嶽と眺
て聖剛川を下る

いうあり千むゆん川の水ろ人よりてうくるさまあり

御上神社 延喜式内名神大月次新嘗祭名三上村と書ん
剛川の堤乃西
祭神 天児屋根命 左若宮天照大神 右十禅師天瓊々杵尊と祀く
末社竈殿楼門あり當社ハ文武天皇六年六月十
八日往産剛ふ四月二申日若宮の神幸八月二四日ハ三上村
の生土神ハて神武巌宮ろう神社乃林間廣くして森然ろう
給の者ハ紙くく永現利生の奇跡ふ多ばさて一ぢ尊敬さん
謹敬ふ申ゝら武傾き仕ばさろう雷鹿ケくくんを勝勝の文振
を思ひれる

三上山 一名秋山もて神社の上ふあり登路十八町ろう五十町
俗ふ恨吹山ともて
上ある一ハ九丈

拾遺ふ八大龍王の剣ろう毎歳六月十八日終日祭して遠近来て登山
千早振三上の山に柳蔭さくハ北ふ陸さる万代ハて上
は奇ふくく柳と名木とする
月 第代を三上代山乃ふ
千載 ふくしたる三上の山乃枝むや八百万代の志ーるん
後拾 雲晴るゝ乃山の秋風ふ吹き波をくいつる月うけ
新後撰 五橋うゝ久色をやちよて春くゝ乃山でそんるうき
月 ちゝ木ゝ所三上の山のゆうけて行るひ土の秋やさんん
五条 志賀の浦や遠く波るほ雲ふ三上の山花ゝまゝれく
三上山坂ふくく那伝を法ひ小篠原て一中へ出く顧ゝ三ハ北廠の
山三ツの峯に見くく富士の俤ふ似くう三坂を越て飛川あり右の
方ふ四ゝうされゝて傘ふ似うる右ハあうて桜ゝうん辻岡
むゝ伝ゝくく矢橋川あて矢のむひ村山大ゝうの金代淀く書る
小堤ゝうゝ篠原堤大篠原に生る神あう又鶴の石ゝく

元亨
義氏乗給
伊勝紀三
武尊つ行之
赤中間之
春仲
信人もゝん

三上山
三上神社
本地堂
神宝
金堂

篠原社　篠原村にあり　古篠原の生祖神

白川七百首

古今　世をいとふ人の住みかとなるなれば　為家

後成　世をいとふ人の住みかとなるなれば　為家

後古　長月の霜の色にぞ篠原の　後成

平宗盛塚　篠原村にあり　今海道の傍よりの宗盛塚と八幡の合祭の社

伝正月之

遥かに見て　有と付れ　逆ふ　加賀を勢光坊と云ふ　賤しく

牲不鳴池　海村にあり　別当高野盛の前あり　池を宗盛前洗池と云ふ　世伝

てらくみ池　加賀国篠原の名ふう

篠山　郷道の右にあり　人の説多し　天日槍しるす　名村初しく

古今　篠山いざ立ちよりて見てゆかん　人待つ間を

日　あふこのや篠の山ちの老やたゆると

後拾　篠山や成らんたのみてもとめ見る　公

拾遺　花の色をうつすやよ篠山まとう後の老やたゆらむ　赤性法師

坂上是則

金乘
新井
新張橋
俵子張
月
風雅
新拾
新後拾
可林
光明紀行

[illegible]
大嶽の峯に風ふき雲ふき月もこゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]

鹿島郡

武佐寺　長光寺村ニあり　一名長光寺

いるゝ所の山際に武佐寺あり

本尊千手観音　上宮ゝの持念佛堂寺ニ霊石有

女尾石ゝ又八天保の番木あり　尚寺むゝ武川組ゝ

者ゝ石成創ル故ニ武佐寺ゝ平家没落の時平重衡東

下て此ゝ此寺に隠ゝ半源平盛衰記ニくゝ

武佐江　近

愛知川中モ武里半ゝ西の方へよりて八幡の門く

行道法五十間許あり

八幡　此辺の新舎此地ゝて高く幸ゝ産土ゝ牧畑地及び布袋

比牟禮社　八幡　瀛津鴻神社云　延喜式

本社中央應神　天皇　左神功皇后　右

田心姫神　湍津姫神　市杵島姫神　此三神を玉依姫尤称ル

天照太神社　本社の稲荷社　本社の若宮　日吉神社

樂天堂藤十郎